

理論社

ボク
徳
朗
とくはらう



花形みづる

徳
治
郎
と
ボ
ク

装画

花形みつる

デザイン

next door design

徳治郎、それがボクのお祖父ちゃんの名前だ。

ボクのお祖父ちゃんは同じ服をすり切れるまで着ていた。こだわりのブランドとかがあったわけでもなく、小柄でやせていたお祖父ちゃんに合うサイズの服がほかになかったから、でもない。強いて言えば、お祖父ちゃんは気に入らないものはぜったい身につけようとしなかったから。

だから、父親の格好を見かねた娘たち（ボクのお母さんとおばさんたち）が新しい服を買ってきて、首まわりがチクチクするのデザインが気に入らないの（お祖父ちゃんはとにかく流行のモノが気に食わないようだった）と難クセをつけ、それらはタンスの肥やし（と言っていたのはお母さんで、タンスにしまつてそれっきりの服とかモノのたとえらしい）になるばかりだった。

お祖父ちゃんほだいたいのが気に入らない人だった。耳の遠いお祖父ちゃんに、三人の娘たちがお金を出し合つて補聴器をプレゼントしたことがあつたけれど、実際に使っているところを見たことは一度もないので、きつと、それも気に入らなかつたのだろう。お祖父ちゃんは、高価だろうが便利だろうが、気に入らなければ見向きもしない。

お祖父ちゃんが一番気に入らなかつたのは、他人にとやかく言われること。そういうお祖父ちゃんにとって、「そんな服みつともないから」とか、「耳が遠いと不便だから」とかの忠告は、親切ではなくおせっかいだつたのだ。

おじいちゃん

お盆とお正月とお祖母ちゃんの命日には、毎年、浦賀のお祖父ちゃんのウチに三人の娘とその家族が集まっていた。ボクんちの家族。ケイコおばさんとその家族。そして、ナオコおばさん。

ボクの頭の中にあるお祖父ちゃんのくつきりとした最初の記憶もお盆のときのこと。あれはボクが四つの夏だった。

居間の食卓には出前のお寿司に、おばさんたちが持ち寄ったピザや空揚げやミートローフやカツサンド、そして、畑でとれた枝豆やトウモロコシやトマトがならんでいた。

「元氣だった？」とか「ごぶさたします」とか「こんにちは」とかみんながお祖父ちゃんにあいさつしていた。お祖父ちゃんはずっと「ああ」と一瞬そつちを見る。それだけ。

愛想もなにもあつたもんじやないが、お祖父ちゃんはそのまんまと思われていたから、だれも気にはしていなかったし、それ以上会話を続けようとする者もいなかった。

お祖父ちゃんに話しかけても、「あ？」と聞き返されるので、そつちのほうがかえつてめんどうくさかったんだろう。

お祖父ちゃんの耳の聞こえが悪くなったのはわりと早かったらしい。六十歳を超えたあたりから、お祖母ちゃんがなんか言うたびに、お祖父ちゃんは「あ？」を連発していたそう。そのうちだんだん聞き返すのがおっくうになると、「もういい」と怒鳴って、「おじいさんはあたしのはなしをちっとも聞きやあしない」と文句を言うお祖母ちゃんをシャットアウト。一切聞く耳持たなかった……なんて話をボクが今でも覚えているのは、三人の娘たちがお盆やお正月に顔をそろえると必ず出てくる話題がそれだったからだ。

「おじいちゃん、『おまえの声はじゃみごえだから何を言ってるんだかわからない』ってよく言ってたよね」

「じゃみごえ……って、いまでもナゾなんですけど」

「おじいちゃんに聞いてみたら？」

「むりむりむりむり」

仏壇の写真のヒトが、『じゃみごえ』のお祖母ちゃんだ。ボクが生まれる前に肺炎で入院した病院で亡くなったので、ボクはお祖母ちゃんに会ったことがない。

「おばあちゃんはおばあちゃん、おじいちゃんのこと、『へそ曲がり』の『怒りん坊』の『頑固者』のって、しょっちゅうブツブツ言ってたし」

「よほど腹にすえかねていたんでしようね」

「ていうか、同じことをぐちぐちとくり返すおばあちゃんだって相当うつとうしかったわよ」

写真のお祖母ちゃんは知らん顔。

「どっちもどっちよね」

「そうそうそうそう」

二人の妹が話をまとめかけたところで、長女のケイコおばさんが首をふった。

「おじいちゃんの頑固のほうが上よ」

例えば、ケイコおばさんの結婚が決まったときのお祖父ちゃんの行動。

結納の儀式の最中、お祖父ちゃんは突然、「畑に行く時間だから」と畑仕事用の薄汚れ

た作業服に着替えてさっさと出て行ってしまったのだそう。今でもケイコおばさんはそのエピソードを、「あのときの、あちらのご両親の驚いた顔。あんなに恥ずかしかったことはなかったわよ」とうらめしそうに話す。

はいはいはいはい。その話は聞き飽きたというような冷淡な反応は二番目の娘のボクのお母さん。

ケイコおばさんがこの話をふってきたときのお母さんの反応がいつも素っ気ないのは、昔からなにかと長女と比べられ、「あんたはいつになったら結婚するの」とお祖母ちゃんに言われ続けていたからなのだった。

「おじいちゃんって、格式ばったことが苦手だったしー」愉快そうに笑っていたのは、三番目の娘のナオコおばさん。「べつにいいじゃん。おじいちゃんの足腰が丈夫なのは毎日畑に通ってるおかげなんだし」

他人事のように笑う妹に、ケイコおばさんが眉を釣り上げた。

「あたしは、畑に文句つけてるわけじゃないのよ。空気読んでよ、って言うてんの」

お祖父ちゃんは毎朝五時に起きる。炊飯器のスイッチを入れ、シロを連れて畑に行く。帰ってくる、ご飯が炊けている。朝ご飯を食べて新聞を読む。天気が良ければ洗濯をす

る。リュックを背負って近所のスーパーに買い物に出かける。買ってきたお弁当やお惣菜を食べながらテレビでお昼のニュースをながめる（アナウンサーのしゃべっていることが聞こえなくても画面下にテロップが出るので内容はわかるのだ）。天気予報で午後の天気を確認した後は、庭木の手入れをしたり風呂場の掃除をしたりする（お祖父ちゃんは風呂好きだった。一日の最後に熱い湯につかるのを楽しみにしていた）。三時（夏は四時）になるとシロを連れて畑に行く。家に戻って晩ご飯を食べてお風呂に入って、寝床で本を読んで眠くなったら寝る、というのが不動の時間割りだった。

いったん決めたことはだれが何と言おうと変えないお祖父ちゃんは、お盆やお正月に娘たちやその家族が来ているときでも時間割りを変えようとはしなかった。

「お祖父ちゃんって、空気、よめないの？」

従姉のマイカちゃんが姉のエリカちゃんの耳元でささやいた。

マイカちゃんはボクより二つ年上だから、あのかきは幼稚園の年長さんだったはず。

「読めないんじゃないかって、むしろ読まない」

語尾を半疑問形にあげたエリカちゃんは、あのかちのボクにはとてつもないほどのお姉さんだった。

「よくいえばマイペース」

二年生のエリカちゃんはむずかしい言葉をたくさん知っていた。

「まいペース？」

マイカちゃんが鼻にシワを寄せた。

「他人のいうことはきかない、自分のやりたいようにやる、ってこと」

「お祖父ちゃん、お耳が遠いもんね」

「聞こえないんじゃないかって、聞かない」

「そうなの？」

「そうよ。耳が遠いんじゃないかって、聞きたくないことは聞こえない耳なの」

エリカちゃんは辛辣だった。

マイカちゃんとエリカちゃんは頭がよくてお行儀がよくて、いつもおそろいのセンスのいい服を着ていた。この従姉たちにボクは相手にされていなかった。多分、ボクが幼稚園過ぎておはなしにならなかったのだろう。

あのかち、従姉たちはマイペースなお祖父ちゃんとは距離を置いていた。お祖父ちゃん

がお祖母ちゃんの話聞くのがめんどうくさかったように、従姉たちもお祖父ちゃんと話すのがめんどうだったのだろう。

従姉たちは本を読んだりゲームをしたりしていた。ボクのお母さんとおばさんたちはおしゃべりに夢中で、父親たちは酔っ払って上機嫌になっていた。お酒を飲まないお祖父ちゃんは一入むつりとテレビをながめていた。テレビの画面に映っていたのは、時代劇の再放送かスポーツ中継か、そのどっちかだったと思う。お祖父ちゃんはニュースのほかはそれしか見なかったから。

だから相手してもらえなかったボクは、お祖父ちゃんの隣に座ってなんとなくテレビ画面をながめていた。お祖父ちゃん自分から話をふってくるようなキャラじゃなかったし、ボクから話しかけるにしても大きな声を出さないと聞こえなかったし、だいたいどんな話題をふったらいいか、四歳児にわかるわけがなかったし、口を一字に結んで不機嫌そうな顔をしているお祖父ちゃんの横で、ボクは黙って画面を見つめているしかなかった。

高台にあるお祖父ちゃんちは風通しがよかった。部屋から部屋へと風が渡り、エアコンをつけなくても涼しかった(ていうか、お祖父ちゃんはエアコンの風が嫌いだったから、エアコンはあってもないのと同じだった)。

お祖父ちゃんは、多分、甚平のようなものを着ていたと思う。下はヒザ下丈のルーズなズボン(昔の下着でステテコという名らしい)だったかもしれない。それが、お祖父ちゃんの夏の定番だったから。

なんの前ぶれもなく、突然、甚平のふところから取り出した物をお祖父ちゃんがボクのヒザにのせた。細長い羽みたいなのが竹ぐしの先にくっついていて。

羽とお祖父ちゃんのを、ボクは交互に見比べてしまった。

色素の薄いビー玉みたいな目玉でボクの顔をながめていたお祖父ちゃんは、

「竹トンボだ」

低いしわがれた声でそう言った。

ボクは黙ったままだった。

竹トンボがなんなのかわからなかったし、だいたい、お祖父ちゃんのほうから話しかけてくるなんて、それまでなかったことだったので、びっくりしてしまっただ。

「飛ばし方を教えてやる」

お祖父ちゃんは気むずかしい顔つきのまま立ち上がり、濡れ縁から庭に出て行った。ボクはあわててお祖父ちゃんのあとを追った。

竹トンボとは、竹ぐしを手のひらで回して、羽を回転させて飛ばすオモチャだった。お祖父ちゃんが回すと、竹トンボは庭の垣根を越えて道路まで飛んで行った。

うわー！

ボクが叫ぶと、お祖父ちゃんは、へへっとくちびるを曲げて笑った。お祖父ちゃんの笑ったところなんか見たことがなかったので、ますますびっくりした。

竹トンボを飛ばして遊んでる最中に、犬のシロがワンワン吠えはじめた。

「畑に行く時間だ」

お祖父ちゃんが言った。

いつものことだけど、いきなり、だった。

ボクはもつと竹トンボで遊びたい気分だったけれど、お祖父ちゃんはいったん決めたことは何があっても変えないこともわかっていた。

「ボクも、はたけ、いきたい」

お祖父ちゃんは、ほうつ、という感じに口を丸め、それから顔全体をゆるめた。

「もうちっと大きくなってからな」

シロを連れて畑に行くお祖父ちゃんの後ろ姿を目で追いながら、はじめてだなあお祖父ちゃんとこんなにいっぱいしゃべったのは、と密かに興奮していたら、

「竹トンボかあ」という声が後ろで聞こえた。

「あたしたちも小さいとき、つくってもらったよね」

マイカちゃんの言葉にはボクの知らない情報が二つ入っていた。このオモチャはお祖父ちゃんが作ったということ。孫全員にあげていること。

お祖父ちゃんは肝心のことをボクに伝えていなかった。ボクは勝手にお祖父ちゃんといっぱいお話ししたつもりになっていただけ、そうでもなかったらしかった。

「それつくるのに、わざわざ山から竹を切り出してきたみたい。お祖父ちゃんって、なんでも山からとってくるんだから」

エリカちゃんの口調は、竹トンボが従姉たちにウケなかったことを物語っていた。

お祖父ちゃんがくれるものは、従姉たちにウケない。

お祖父ちゃんは竹だけでなく、山からいろんなモノをとってきたけれど、どれも従姉た

ちにはウケなかった。クワガタやカブトムシにも、従姉たちは見向きもしなかった。

お祖父ちゃんが山からへビの抜けガラを拾ってきたときなんか、従姉たちはものすごく嫌そうな顔をしていた（ボクは、おもしろいと思ったけど）。

お祖父ちゃんは女の子が好きなのがよくわからないようだった。

畑

お祖父ちゃんの畑にはじめて連れて行ってもらったのは、ボクが幼稚園の年中組のとき、梅雨の晴れ間の蒸し暑い日だった。

あのころ、お母さんはボクを連れてしょっちゅう実家に帰っていた。一人暮らしのお祖父ちゃんが心配だから、とお母さんは言っていたけれど、実家に帰ってもぼんやりしてたり、ボクをお祖父ちゃんにあずけて出かけたり（横須賀にはお母さんの昔からの友だちが住んでいた）で、心配しているようにはとても見えなかった。

お祖父ちゃんは元気でだいたいのことは自分でできていたから、なにが心配なのかもボクにはよくわからなかった。

あの日もお母さんは、お祖父ちゃんちの廊下にあった黒い固定電話で、せき止められていたダムの水門が開いたみたいない勢いでだれかとしやべっていた。お祖父ちゃんは居間に